



TITLE:

京都外科集談会抄録

AUTHOR(S):

CITATION:

京都外科集談会抄録. 日本外科宝函 1956, 25(1): 107-112

ISSUE DATE:

1956-01-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/206230>

RIGHT:

京都外科集談会抄録

昭和30年10月例会

(1) 特異な組織像を呈した乳腺腫瘍の1例

秋山英一郎

我々は最近、臨床的に、左乳房の無痛性腫瘍の急速な増大、局所の発赤、静脈拡張、著明な圧痛を主要症状とした、55才の女子に於て最初乳腺炎を疑いペニシリンを使用したが無効で、癌性乳腺炎の診断の下に左乳房切断術を施行し、組織学的に検索した結果、内皮細胞腫であることが明らかとなった。乳房内に発生せる内皮細胞腫は非常に稀なものであるため、ここに報告する。

(2) 結核性腱鞘炎の1例

広谷速人

症例 41才 男子 会社員

約6年前より右前腕屈側に無痛性腫瘍を生じ、4年前および2年前手術を受けたが再発を来し、最近ことに右手の運動障害・右前腕部の鈍痛を訴えて来院。肋膜炎の既往あり。

右前腕末梢端屈側尺骨軸に一致して胡桃大の腫瘍を認める。局所および胸部レ線像正常。赤沈値中等価3.5 mm.

手術するに腫瘍は総指屈筋腱鞘より成り、黄色漿液性液・弛緩性肉芽・米粒体を含み、浅・深指屈筋腱も侵されて一部断裂さえ見られた。そこで罹患組織を可及的に切除掻爬した。ストマイ併用。

術後比較的早期より自他動運動を開始し、約6ヵ月後の今日再発を見ない。

なお本症は本邦に於いて18例の報告があるに過ぎず、本症に見られる様に男性、右手、掌側に多い。再発例の報告も多く、ストマイ投与下の病巣廓清術を行うべきである。

追加

松村友昭

私は右足関節腓骨筋腱鞘、後脛骨筋腱鞘にそつた有痛性腫脹を来した、5才の男子に足関節結核の疑いのもとに保存的療法を行つたが軽快せず、手術の結果足関節囊外周囲軟部組織に主として病変をもち、病理組織学的に結核性病変を認め、臨床上認めた腫脹が主として結核性腱鞘炎によるものと認めたのであるが、この腱鞘炎が単独に起り周囲組織に波及せしものか結核性の足関節炎滑液膜型が関節囊外周囲組織に炎症が波及し、腱鞘炎を来したのか診断上困難なる症例を経験しましたので追加します。

(尚全経過中足関節機能殆んど障碍されず、又レ線像にて異常所見を認めません。)

(3) 子宮癌骨盤腔内転移により発生せると考

えられた白股腫の2例

辻健郎、倉田昌彦

子宮癌及び骨盤腔内腫瘍より由来せると思われる、白股腫2例に就いて報告した。

内1例は開腹、血管移植を試みんとしたが、果し得なかつた。他の1例は開腹しなかつたが、転移形式、標本所見等より、子宮癌に由来せるものであらうと考えた。下肢疼痛に対し、アルコール硬膜内注射を施行したが、著効なく、僅に両例共、レントゲン深部治療にて、疼痛の軽減を図り得た。

(4) 距骨々折並びに距骨脱臼骨折の治験例

山果時房

距骨々折及び距骨脱臼骨折は骨折中比較的稀なものであり、その治療法に就いてもなお多くの問題を残している。私は最近距骨々折並びに距骨脱臼骨折の各1例を経験した。

何れも距骨頸部の骨折で1例は骨体部が軽度縦軸廻転々位が認められ、他の1例は骨体部が内旋し後内方に脱臼転位を来していた。

之等の症例に対し観血的整復術を試みた。即ちアヒレス腱を切断、三角靱帯及び関節囊を骨折部の内側で切開し骨折部を整復後距骨後方突起より長軸にキルシュナー氏鋼線を刺入し更に骨折部に Stapling を行い充分固定した。

之等の症例は術後日数が浅く決定的なことは云い難いが手術操作が比較的簡単で、又最も問題視される距骨々折片の血行保存の目的よりしても距骨に附着する軟部組織を損傷すること少く而も骨折面の接合は強固であり充分なる効果が期待出来るものと思われる。

追加

藤野昭三

最近約1年間に於て経験した距骨骨折の2例を追加した。第1例は約5mの高所から落下、両足を打ち、両側跟骨体部骨折と共に、左側距骨の後方突起骨折が認められ、跟骨骨折に対して、キルシュナー氏鋼線による固定を行つたが、約6ヵ月後治癒した。第2例は作業中岩石崩壊し、その下敷となつたもので右距骨頸部骨折を認めるが、骨転位は著明でなく、保存的に治療して治癒している。

(5) 若年期椎間板ヘルニアの手術例

山果時房

若年期即ち19才未満の患者で昭和28年以降椎間板ヘルニアに手術例を経験した、症例は10才、14才、15才、16才、17才各1例、18才4例、19才3例で、又男子9例、女子3例であつた。本症発生の誘因として外傷の

認められるものは6例、同時に脊椎分離症を合併したものの2例、又ミエログラフィー前後画像に於て異常を認め得なかつた2例にも強度の椎間板ヘルニアを証明した。

若年期と雖も椎間板ヘルニアは充分に起り得る可能性をもつて居り、又若年期の椎間板障害が一旦治癒後、後年再びヘルニアを惹起する場合も多い、然し一方若年期に於ては一次的椎間板障害も保存的療法により永久治癒を見るものも少なくない、茲に我々は発病後3ヵ月以上保存的療法により治癒傾向不良のものに対しミエログラフィー続いて手術的療法を試み軽快乃至治癒の好結果を得た。

(6) 糞石性虫垂症について

山崎 雄 弘

最近我々は、虫垂炎の診断の下に開腹し、虫垂に肉眼的に炎症所見殆ど無く、虫垂内に多数の糞石を認め、虫垂切除術によつて術前の苦訴全く去り、虫垂炎と思われた疼痛はこの多数の糞石の存在によると思われ、糞石性虫垂症とでも名付くべき症例群が次第に増加して来たのに気が付き調査するに、同一虫垂内に3箇以上糞石の存在するもの、昭和28年度迄虫垂切除例中4%内外、29年度15.4%30年度5月末迄に20%に及んでいた。かゝる症例群に於ては一般虫垂炎と同様症状を呈するも、体温36℃台、白血球数1万以下のこと多く、1年を通じ各月共均等なる発生を見、女性に多く且工員に多く見られた。治療は、これらの症例群を放置しても重篤なる虫垂炎に進展しないように思われるが、保存的療法の確実なものが不明であるから、虫垂切除術が現在宜しいと考えている。

追 加

戸 部 隆 吉

私は兵庫県加西郡北条町北条病院赴任中、同様な症例即ち、臨床的には急性虫垂炎の症状を呈しながら、切除標本には肉眼的に糞石が存在し、その粘膜部に軽度の溢血点を認める他は殆ど異常を認めないという様な症例を、昭和29年4月から昭和30年5月までの180切除例中19例即ち1割強に於て経験した。この様な症例は臨床的に次の様な点に於て特異であると思われるが如何？

- 1) 自発痛は最初から右下腹部に限局して発現することが多い。
- 2) 筋性防禦、圧痛の著明な割合に、発熱、白血球増加を示すことは少く、発熱は微熱程度、白血球は正常域のことが多い。

演者：同感である。

- 3) 私の経験例も演者と同様女性に多く、19例中、女15、男4の割である。

(7) 当教室最近10年間に於ける肋骨々折

大石 宏、土屋良之、中島秀典

肋骨々折484例を統計的に観察した。

- 1) 年齢別：20～60才が多く20才以下は非常に少い。
- 2) 骨折部位：左右共に第5、6、7肋骨が多い。

- 3) 全例の57.9%は単なる転倒、たたかれる等の比較的軽い外力でおこっている。
- 4) 特発性のものは19例で比較的老人に多い。
- 5) 外傷後症状発現迄1～3日程度の無症状期間のあるものが10%であり興味深い。
- 6) 限局性圧痛、体運動或は深呼吸時疼痛は全例に見られ喀痰、発熱転位は10%内外で咳嗽あるものが26%であつた。
- 7) レ線学的診断値は非常に低く骨折確認されたものは僅かに25.8%である。
- 8) 副損傷は3例、他部骨折を合併しているものは15例である。
- 9) 52%に絆創膏固定、陳白性のものに対し主に光浴超短波を行う。
- 10) 入院11例中4例は肋骨切除術を行う。

(8) 虫垂切除後盲腸腔内に発生せる Schloffer'scher Tumor.

柴 垣 進

虫垂切除後約7ヵ月を経た患者の盲腸腔内に、虫垂切除断端の結紮糸を中心にSchlofferのTumorの発生した1例に遭遇したので、若干文献的考察を加えて報告する。

患者は55才の女子。昭和30年7月26日入院。入院1週間前より廻盲部に急性炎症の所見なく腫瘤をふれる様になった。

開腹術の結果は前回の手術時巾着縫合を行つた際、中に挿入された虫垂断端を結紮せる糸を中心に腸壁内に発生したSchlofferのTumorであつた。

SchlofferのTumorは1909年Schlofferが化膿菌の感染を条件として異物性慢性炎症性腫瘤を記載して以来、多数の発表例があるが、この症例の如く、虫垂切除断端の結紮糸を中心に発生する事は虫垂断端処置に検討の必要がある。

1936年Breaは21種類にわたる虫垂断端処理方法を列挙しているが、何れも一長一短がある。

患者の口述によると、前回の手術時の虫垂は拇指頭大以上で、壊死になつてゐた由であるが、われわれが通常行つているThomson, Kelly等の方法は、この様な症例には不適當で、即断端の炎症の強い場合には断端を充分焼灼するだけで結紮せず、その上に巾着縫合を行うようにするJonett, Dawbarn, Smith等の方法が一番よいのかも知れない。

(9) 皮脂腺々腫の1例

池 上 潔

私は最近顔面左頬部に無痛性の腫張を来した、臨床的にLymphangiomaを思わしめた患者に就いて試験的切片の組織学的検索の結果、皮脂腺々腫Adenoma Sebaceumであつた1例を経験したのでこゝに報告し併せて若干の考察を加えた。

(10) 脾腫を主徴とした真性脾臓囊腫の1例

酒井正宏、倉田昌彦

患者：25才，男。既往歴及び現病歴：昭和30年6月胆石症及び慢性胆嚢炎にて胆嚢剔除を行う。術後1ヵ月にて心窩部膨隆を来しX線検査により脾臓腫と診断したが、更に其の3週間後、心窩部膨隆は消失し、肋弓下4横指の脾腫を見る。軽度の貧血あり（赤血球数437万、赤血素82%）9月9日剔除の目的で開腹した。

手術所見：胃の後方横行結腸の上方に球状、超手拳大の真性脾臓腫あり、脾静は此れの圧迫により怒張、即ち脾腫は局所的門脈圧亢進に依るものと判明した。脾臓腫は周囲と癒着強く剔除不可能の為外瘻を造設したが、脾腫は数日にして消失した。

考案：胆石症患者の胆嚢剔除後発生した真性脾臓腫（恐らく変性腫）により脾静脈が圧迫され、脾腫を来して主徴となつたのであるが、かかる局所的門脈圧亢進症を来した症例は、興味深いものであると考える。

質問及び追加

本庄助教授

本例を変性腫と断定された根拠如何？

（演者・「別に根拠はなく唯変性腫ではないかと考えただけ」と返答）

変性腫の定義がまだはつきりして居らず、脾臓腫瘍の分類の中にもあまりこれを見ないように思う。又、このものが真性の腫瘍又は仮性腫瘍のいずれに属せしめるものか不明のように思う。

(11) 水痘に由来せると考えられる Acute disseminated Encephalomyelitis の1例

押谷貞亮

Acute disseminated Encephalomyelitis の後遺症として、左の Hemiplegie と、全身痙攣を来した1例を報告した。本症の病因及び多発性硬化症との異同は、今日判然とせぬ所が多いが、その誘因として、水痘等の伝染病が大きな役割を演じていると思われる。

尚全身痙攣に持続睡眠療法を施行し、著効を認めた。

(12) 十二指腸潰瘍大穿孔による汎発性腹膜炎に対して手術後発生せる十二指腸瘻を治癒せしめ得た1例

寛 鎮 郎

十二指腸瘻は胃腸管乃至胆道の外科に於て術後の合併症として、時に遭遇する最も不愉快な合併症の1つであり、其は治癒困難であるが私は最近十二指腸潰瘍大穿孔による汎発性腹膜炎手術後、発生した十二指腸瘻に対して治癒せしめ得た症例を報告し、若干の検討を加えて見た。

症例は穿孔後約10時間目に手術を施行、術後1週間全く腸蠕動を聴取出来ず且放屁もないが、患者の一般状態は憔悴の度を加えて来たが、大量の輸血輸液等によつて1週間目より腸蠕動聴取と同時に“ガス”が自然に排出これを境として急速に回復したに穿孔部に挿入せるドレーンにより胆汁を少量ながら間断なく排

出したるにこれを2.3日後より右側臥位より左側臥位に体位転換し、これにより急速に胆汁の排出減量し治癒せしめたがこれが治癒機構として若干の検討を加えた。

追加討論

杉本雄三氏 本例の如く大きな穿孔があり閉鎖不能と思われる場合、なるべく外瘻とせず内瘻の形にもつて行けないものか。例えば Roux 氏手術のような方法で。文献にこのような報告はないか。

本庄助教授 最近の抗生物質の発達によりよほどの穿孔でもこれを閉鎖することが出来るようになったから成る可くその辺の漿膜を利用して閉鎖するように努めるべきだと考える。特に Roux 手術の如き不自然な方法は不適と考える。なお術後性消化性潰瘍を形成する点から潰瘍の際に Roux は行わないのを通例とする。

(13) 上腰骨限局性繊維性骨炎の2治験例

大 谷 碧

ともに外傷の既往を有する14才の女子及び15才の男子の上膊骨上端に発生せし本症を相次いで経験し、いづれも全周にわたり骨質が菲薄となつているため広範囲に病巣部を切除し、その全周骨欠損部に対しては有骨膜腓骨片をもつて架橋補填し、1年余の経過観察の結果、全骨片としての腓骨は移植後機能的要請に応じて漸次肥厚し、且つ肩関節機能も正常に近く保持することが出来、再発の徴候もなく良好なる結果を得ることが出来た。

(14) 胸椎カリエスと誤られた先天性脊椎融合症の1例

・藤田栄隆、大谷 碧

胸椎カリエスと診定せられ、コルセット装用加療を命ぜられていた患者が線検査から先天性脊椎融合症である事を発見するに到つた1例を報告し、両者の類症鑑別診断に就て検討すると共に、先天性脊椎融合症の成因について文献的考察を試みた。

(15) 剥皮術に依る外傷性血胸の治験例

中村和夫、石川 登

われわれは最近、外傷性血胸に依る膨脹不能肺に対し、肺剥皮術 (Decortication) を施行し著効を認めた症例を経験した。

患者は30才の男子で、昭和30年4月26日左前胸部を包丁で刺され、血胸を来し、穿刺等の内科的治療を受けたが、なお高度の呼吸困難を自覚するので、6月3日当外科に入院した。左胸廓の呼吸運動が制限され左胸部全般に濁音を呈し、呼吸音は著しく減弱、前下部及び後部では殆ど聴取しなかつた。胸部線像で左肺は完全に虚脱して肺門部に腎臓型に認められ、肺活量は1700ccであつた。6月9日(受傷44日目)、気管内麻酔のもとに、後側方切開を行い、第6肋骨を切離して開胸、胸腔から大量の血性貯留液を吸引後、肺剥皮

術を施行した。体壁側 peel の肥厚は軽度であつたので肺側 peel のみを切除した。術後72時間持続吸引を行つたが、以後は殆ど穿刺液を得ず術後2週間で左肺は略完全に再膨張した。肺活量は2800ccに達し、呼吸困難は全く消失し、7月30日全治退院した。

(16) 強化麻酔の経験

黒田秀夫, 鈴木正貢, 牧 安孝
松本浩生, 元重博文

我々は最近自律神経遮断剤を用いて前処置を行い、所謂「強化麻酔」を行つて70数例に於て手術を行つたが非常に好成績を収めたので、実施方法、症例及び経過を報告する。

(A) 軽便無痛法

前処置として次の如く行い、更に各種麻酔剤を併用して次の如く実施した。

(1) 手術前夜イソミタール 0.2 及びビレチアジン 0.1 を就眠前に頓用として与える。

(2) 術前3時間にコントミン 0.05, PZC-2 0.05, オビスタン 0.07 を筋注する。

(3) 術前1時間にコントミン 0.05, PZC-3 0.05, オビスタン 0.105 を筋注する。

以上の如き前処置を施して

(i) エーテル吸入麻酔との併用。

(ii) 腰椎麻酔との併用。

(iii) 局所麻酔との併用。

(iv) ラボナール全身麻酔との併用。

(B) 麻痺剤なき全身無痛法

(A) に於ける前処置と殆んど同様であるが、唯、術前1時間30分に、冷却生理的食塩水 500cc, V. B₁ 0.1, V. B₆ 0.1, マグネゾール 5.0, スパチーム 0.2, プロカイン 4.0 の混合液を点滴静注を行う。時には術前1時間にスピカインアミド 0.2 の静注を行うこともある。

以上 (A) (B) 合せて5種類の方法により強化麻酔を実施しているが、何れも優れた成績を示している。

① 特別な副作用もなく外科手術に必要な麻酔状態が得られること。

② 特殊な操作設備を要せず手軽に実施出来ること

③ 特に術後の苦痛の少ないことにより本法は非常に優れた麻酔法である。

昭和30年11月例会

(1) 肺部損傷を伴える肩甲骨肋骨々折の1治験例

林 瑞庭

最近本院にて気胸を伴える肩甲骨、肋骨々折骨盤骨折の1例を経験し之を治癒せしめ得たのでその経過を観察し次の結論を得た。

1) 肺損傷を伴つた肩甲骨又は肋骨々折の第1の治療は「ショック」状態より速かに回復せしめることにある。

2) 第1次ショックより回復すれば代償機能に依つて一般状態は速かに改善し得ること。

3) 肩甲骨体部骨折は肩甲骨自身強大なる筋にて蔽はれてゐるため仮関節の状態にあつても予後良好で肩関節機能障害は案外少いこと。

以上報告する。

(2) 興味ある慢性脊椎棘突起骨髄炎の1例について

林 瑞庭

脊椎の化膿性骨髄炎に就いて近年報告例は増加し、昔考えられた程稀な疾患でなくなつて来たが、慢性に経過した化膿性脊椎炎は結核性のものと区別はつきにくい。

最近私は薬物「イルガビリン」の注射の化膿に依り惹起され膿胸及び脊椎の化膿性骨髄炎を併発した1例を経験し、目下経過観察中である、標本作製検鏡に依り結核性でないことを確め得たので、ここにその類似

性を比較検討し治療方法を述べた。

(3) 最近4ヶ年間に本院外科手術に於ける麻酔法の統計的観察

牧 安孝

1) 私共は最近4ヶ年に於ける外科手術時の麻酔法について統計を行い、いさゝか考察を加えた。

2) 他のこの種統計に比し、麻酔の種類が少く、又全麻例の少い事は地方病院の麻酔の現状を示すものであるが、閉鎖循環麻酔、強化麻酔の使用に依つて、次第に改善される傾向にある事は喜ばしい。

3) 手術の麻酔法を決定するに当つて、1つの麻酔法にとらはれる事なく、各種麻酔法の特徴を活かして、併用し、その例に対する最適の麻酔処方を決定すべきである。

質 問

田 辺 治 之

小児麻酔にラボナール筋注とレスタミン注で行われているようですが、レスタミンの量は?

(4) 診断不明のまま放置されいたる若年者巨大両側卵巣腫瘍の治験例

長 洋, 伊井政義

臨床外科方面に於て、下腹部外科と婦人科との境域問題に関連して診断に困難なる場合を経験することがある。最近長期間診断不明のまま経過せる若年者巨大両側卵巣乳嚢腫の手術例を経験し、而もそれが組織学的に癌性変化を認め診断に困難を感じた症例に遭遇し

たので我々外科医も又婦人科的診察を綿密に行う必要を痛感したので報告する。

(5) 下頸部正中線に発生せる稀有な畸形腫の1例

占 部 英 彦

我々は最近下頸部正中線に発生せる畸形腫の1例を経験したので茲に報告します。

症例、25才の既婚女性。

主訴、前頸部の無痛性腫瘍。

現病歴、昨年6月頃より前頸部の無痛性腫瘍に気付いた。之は稍々増大して来た様である。発赤、静脈怒張等はない。弾力性硬であるが、一部に軽度の波動を認める。移動性なく又、嚥下を命じても腫瘍は共同運動を行わない。腫瘍の位置的関係から甲状腺腫が考えられるが、嚥下運動と共同運動を示さぬ事実から、他の腫瘍を想定しなければならなかつた。手術により完全に摘出したが果して我々の考えの如く腫瘍は甲状腺とは全く無関係であつた。組織学的には甲状舌管の残基を中心として発生せる畸形腫であつた。

(6) Chlorpromazineの術後疼痛に対する使用

吉武泰男, 里村紀作

22例の術後疼痛にChlorpromazineを使用し相当の効果をえた。本剤使用の利点は、

- 1) かなり長時間効果が持続し、麻酔剤の作用を昂め。
 - 2) 危険な副作用なく。
 - 3) 悪心、嘔吐、吃逆等の不快な症状を抑制し得る。
- 本剤使用による低血圧には、一般低血圧に伴う不快な症状は認められない。

(7) 虫垂切除術に於ける腸骨稜上切開について

今村伸二, 中瀬 明

従来虫垂切除を行う際の皮膚切開は、殆んどの場合ラップ氏四角形内に実施されているが、我々は前腸骨棘より上方2横指の点より腸骨稜に沿つて後方に2横指の皮切を加えて虫垂切除を試みた。即ち皮切後内外腹斜筋を夫々筋線維の方向に鈍的に圧排して腹膜を露出し之を皮切と同方向に切離して原則として大網紐を辿つて虫垂根部に達し逆行性切除を行う。

本法は虫垂炎の診断が確実な場合にみに用い術後の知覚障害や脱力感はない。手術痕は前方から殆んど見えない。本法に類似せる側腹部切開法として、Roux, Sonnenburg 氏法その他があるが本来が膿瘍切開を目的としたもので本法とは適応も術式も異なる。又背側切開法があるが之は特殊の目的に使用され本法とは全く異なるものである。

質 問

田 辺 治 之

1. 術後Langeacain等は使用しておられませんか？

答

使用していない。

追 加

田 辺 治 之

Rectumkrebs で Haupt Tumor は、とれない為人工肛門を造つているが、Krebs の為の Schmerzen が強い。

此の Kranke に、現在迄約10日間、毎就眠前に、Wintermine 50mg 筋注を行つている。副作用なく熟睡出来る。

追加2

牧 安 孝

吾々も Cocktail M₁ Cocktail C₁の術前使用(筋注又は点滴)によつて優秀な術後鎮痛作用を経験して居る。

Cocktail C₁

Contonin	50mg	} 術前3時間筋注
P. Z-C 2 (Dipancol)	50mg	
Opystan	70mg	

Cocktail M₁

Contomin	50mg	} 術前1時間筋注 (又は点滴)
P.ZC-3(Pyrethiazin)	50mg	
Opystan	105mg	

質 問

本 庄 一 夫

直腸癌の患者に人工肛門を造設した後でクロールプロマジンを使用し疼痛を緩和したというのは今演者の述べた術後の疼痛に対してであるか、或は癌性疾患の為に惹起された疼痛に対してであるか。

(8) 2年間に経験した骨折例より

杉本雄三, 平野 巖

我々は病院開設以来2年間に、指、趾、肋骨々折、頭部外傷を除外して入院を要したような骨折を50例経験し、本学整形外科と絶えず連結して、29例を観血的に、21例を非観血的に治療し、概ね良好な成果を得た。手術例の多いのは附近の整骨師に対して絶えず指導的に連絡し、彼等をして治療の限界を知らしめた為、手術によらねば治癒し難いような患者を選択的に送院された為である。上腕、大腿骨々折は転移の少ないもの以外、キュンチャーの髄内固定法をした。前腕、下腿は2本とも折れているものをキュンチャーで治療した。1例の下腿骨例は、仮関節を形成し、骨移植の再手術が化膿、再び仮関節を作り目下再び骨移植中である。大腿頸部骨折は老婆に断然多く、スミスビータソン三翼釘による固定をした。鎖骨々折は必要に応じて、時にキルシュナー鋼線による固定法をなした。その中1例に仮関節を形成したが、腐骨剔出により自然治癒した。膝蓋骨折は鋼線によつて整備固定した。跟骨々折中2例はキルシュナー鋼線を用いた。

(9) 肝臓腫瘍と誤れる右腎臓血管内皮腫の1例

戸 部 隆 吉

患者は18才の女子、右季肋部の無痛性腫瘍を主訴と

して来院す。腫瘍は略々肝臓腫脹の如き形を呈し、表面平滑、境界明瞭、硬度は緊満弾性、軽度の圧痛を有し、bimanuellに触診すると僅かに後方で腫瘍をふれ得るが腎臓腫瘍を思わせる程著明ではない。排泄的腎盂撮影像、逆行性腎盂撮影像でその排泄機能は正常であるが、右腎盂が上方から強く圧迫され変形を来し、又腹部透視像では、胃及び十二指腸が全体として強く左方へ圧排されている。触診所見から、肝臓腫瘍を疑い開腹した所、右腎臓腫瘍であり、組織学的には血管内皮腫であつた。

(10) 大なる癭痕組織に対するトリプシン及びヒアルロニダーゼ注射治療について

松 村 浩

53才の女で下腹部腹壁皮下に、手掌大の癭痕組織を有するものに、手術的に切開掻爬した後、前後6回にわたり、トリプシン合計15万単位、ヒアルロニダーゼ合計2万2000単位を局所に注射した結果、約80日の観

察で、次第に癭痕は軟化縮小し、終に鶏卵大の弾性軟な腫瘍となつた。三回にわたつて組織検索を行つた所では、結締組織の壊死融解を周囲の脂肪組織が埋め、或は結締組織そのものの脂肪変性により、軟化縮小したものと考えられる。又この癭痕の原因は不明であるが、恐らく非特異性の慢性炎症の結果であろう。

(11) 当教室最近10年間のスポーツ外傷

鶴海寛治、相馬秀臣、加藤 宏

昭和21年4月より昭和30年8月迄の当教室最近10年間のスポーツ外傷について調査した結果を報告。対象となつたスポーツは22種類総スポーツ外傷例数は727例部位別、スポーツ別に分類、頻発するスポーツ外傷中、野球器械体操、柔道、スキー、スケート、角力、ラグビー、陸上競技、籠球、排球、馬術についてはそのスポーツ特有とみられる疾患について簡単な考察を加えた。

編 輯、後 記

◎編輯と云つても集つた原稿を受付順にのせるだけでは能がなさすぎるとお叱りをうけるかも知れない。その内に何とか異色ある編輯をやつて見たいと念じております。

◎原稿には必ず新仮名づかいを使つていただくよう又新しい解剖学名を出来る丈使つていただくと共に当用漢字を使つていただくよう切におねがいします (例えば脾臼というのを寛骨弓というように又臑骨というのを中足骨というように)

◎いつものことながら校正の不備については御指導、御叱正をおねがいします

◎日本外科宝函も復刊以来第4年目これからいよいよ発展することと思ひます

(藤 田 栄 隆)